病棟

迂遠な作用が
じわりじわりと働いてゆく

目を開いているのか
それとも閉じているのか―――

枯渇した想像力に代わって
次々と脳細胞を占領する「事実」

個室の扉にかけられた錠前
彼らは見抜かれることを怖れている

モニターに映し出される「事実」
“くまなく映し出された、それさえあればよかろう？”

悲鳴のような音を聞いたのは
あれは、空耳であったろうか・・・

くつくつとした含み笑いを聞いたのは
あれは、空耳であったろうか・・・

モニターを操作すると
確かに、それらは映像付で記録されていた

彼らは言う
“我々は、事実をすべて掌握している”

“小さく、狭い世界の中で
宇宙全体が歪んでいる、と喚き散らすことは無意味だ“

（確かにそのとおりだ・・・）

僕は扉を慎重に調べてみた
そして、一息に蹴飛ばしてみた
意外にも鍵は脆かった
僕は逃走した

僕の五感が大きく伸びをするようになったのは
それ以来のことです

(2009.11.23)